

一休宗純

出生地は京都で、出自は後小松天皇の落胤と伝えられている^[注 1]。母親の出自は不詳だが、皇胤説に沿えば後小松天皇の官女で、その父親は楠木正成の孫と称する楠木正澄と伝えられ、三ツ島（現・大阪府門真市）に隠れ住んでいたという伝承があり、三ツ島に母親のものと言われる墓が現存する^[3]。

また、一休は地蔵院の近くで生まれた後^[4]、6歳で出家するまで母（伊予局という）とともに地蔵院で過ごしたと伝えられている^[5]。

幼名は千菊丸と伝承され^[6]、長じて周建の名で呼ばれ狂雲子、瞎驢（かつろ）、夢闇（むけい）などとも号した。戒名は宗純で、宗順とも書く。一休は道号。

6歳で京都の安国寺^[注 2]の像外集鑑（ぞうがいしゅうかん）に入門・受戒し、周建と名付けられる。早くから詩才に優れ、応永13年（1406年）13歳の時に作った漢詩『長門春草』、応永15年（1408年）15歳の時に作った漢詩『春衣宿花』は洛中でも評判となった。

応永17年（1410年）、17歳で謙翁宗為（けんおうそうい）の弟子となり戒名を宗純と改める。ところが、謙翁は応永21年（1414年）に死去し、この頃に一休は自殺未遂を起こしており^[7]、謙翁の死から一週間、石山観音に籠もるも悟りが開けず近くの川に身を投げようとしたが、一休の様子が変だと一休の母から見張ることを指示されていた男が制止、説得されて自殺を思い止まったという^[8]。

応永22年（1415年）には、京都の大徳寺の高僧、華叟宗曇の弟子となる。「洞山三頓の棒」という公案に対し、「有漏路（うろぢ）より無漏路（むろぢ）へ帰る一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け」と答えたことから華叟より一休の道号を授かる。「有漏路（うろぢ）」とは迷い（煩惱）の世界、「無漏路（むろぢ）」とは悟り（仮）の世界を指す。

応永27年（1420年）、ある夜にカラスの鳴き声を聞いて俄かに大悟する。華叟は印可状を与えようとするが、権威を否定する一休は辞退した。その毅然とした振る舞いを見た華叟は、口では「ばか者」と言いながらも笑って送り出したと伝わる。以後は詩、狂歌、書画と風狂の生活を送った。

文明2（1470年）、摂津国住吉大社神宮寺の新羅寺本堂・薬師堂で森侍者（しんじしゃ）と出会う。

文明6年（1474年）、後土御門天皇の勅命により大徳寺の住持^[注 3]を任せられた。寺には住まなかつたが再興に尽力し、塔頭の真珠庵は一休を開祖として創建された。また、戦災にあった妙勝寺を中興し草庵・酬恩庵を結び、後に「一休寺」とも呼ばれるようになった。天皇に親しく接せられ、民衆にも慕われたという。

文明13年（1481年）、酬恩庵（京都府京田辺市の薪地区）においてマラリアにより死去。満87歳没（享年88）。臨終の際の言葉は「死にとうない」であったと伝わる。墓（御廟所）は酬恩庵にあり「慈楊塔」と呼ばれるが、宮内庁が管理している陵墓である^[注4]ため、一般人が墓所前の門から内部への立ち入りはできないが、廟所の建物は外部からでも見える。参拝は門の前で行う。

逸話・作品

以下のような逸話が伝わっている。

- 印可の証明書や由来ある文書を火中に投じた。
- 男色はもとより、仏教の菩薩戒で禁じられていた飲酒・肉食や女犯を行い、盲目の女性である森侍者（森女）という妻や岐翁紹禎という実子の弟子がいた。
- 木製の刀身の朱鞘の大太刀を差すなど、風変わりな格好をして街を歩きまわった。これは「鞘に納めていれば豪壮に見えるが、抜いてみれば木刀でしかない」ということで、外面を飾ることにしか興味のない当時の世相を風刺したものであったとされる。
- 親交のあった本願寺門主蓮如の留守中に居室に上がり込み、蓮如の持念仏の阿弥陀如来像を枕に昼寝をした。その時に帰宅した蓮如は「俺の商売道具に何をする」と言って、二人で大笑いしたという。
- 正月に杖の頭にドクロをしつらえ、「ご用心、ご用心」と叫びながら練り歩いた。「人はいずれ死ぬから正月とはいえ浮かれ過ぎるな」という無常を訴えたとも、ドクロの眼孔を差して「目出たい（めでたい）」の洒落であったとも伝わる。

こうした一見奇抜な言動は、中国臨済宗の僧・普化など唐代の禅者に通じ、禅宗の教義における風狂の精神の表れとされる。同時に、こうした行動を通して、当時の仏教の権威や形骸化を批判・風刺し、仏教の伝統化や風化に警鐘を鳴らしていたと解釈されている。彼の禅風は、直筆の法語『七仏通誠偈』が残されていることからも窺える。

このような戒律や形式に囚われない人間臭い生き方は、民衆の共感を呼んだ。江戸時代には、彼をモデルとした『一休咄』に代表される頓知咄（とんちばなし）を生み出す元となった。

一休は能筆で知られる。また、一休が村田珠光の師であるという伝承もあり、茶人の間で墨蹟が極めて珍重された（なお、珠光の師という説は現在の研究ではやや疑わしいとされる）。

著書（偽書を含む）に、『狂雲集』『続狂雲集』『自戒集』『一休骸骨』などがある。

東山文化を代表する人物でもある。また、足利義政とその妻日野富子の幕政を批判したことも知られる。

一休さん（いっきゅうさん）は、室町時代の臨済宗の僧一休宗純の愛称。主に、その生涯に様々な説話を残した事から江戸時代に説話『一休咄』が作られ、頓知で有名となる。

昭和の終頃まで、絵本の童話の題材、紙芝居の題材として良く用いられた。特に、屏風の虎退治などの話は有名。

代表的な説話

『一休咄』は作者不詳で、世に出たのは一休の遷化から200年余り後の江戸時代前期・元禄年間である。実在の一休が周建を名乗っていた幼少時代に時代が設定される。『一休咄』は民衆の願いを歴史上の人物に仮託した読み物で、一休の事績の他に、一休になぞらえた民間説話や登場人物を他の高僧から一休に置き換えた伝説が数多く挿入されており、史実とは言い難い。

屏風の虎退治

足利義満が一休に出した問題の一つ。

「屏風絵の虎が夜な夜な屏風を抜け出して暴れるので退治して欲しい」と義満が訴えたところ、一休は「では捕まえますから虎を屏風絵から出して下さい」と切り返し、義満を感服させた。

このはし渡るべからず

桔梗屋が一休に出した問題の一つ。

店の前の橋を一休さんが渡ろうとすると、「このはしわたるべからず（『この橋を渡るな』の意）」と書いてある。しかし一休は、「この端（はし）渡るべからず」と切り返し、橋の真ん中を堂々と渡った。

後日談で、同じ問題に加えて「真ん中も歩いては駄目」と難題を出されたが、「橋に乗らねばよいのだろう」と敷物を敷いてその上を歩いて渡ってきた。